〝訴えん〟にこの協力者

前号にひきつづき、全国からカンパを寄せていただいた機関や個人を紹介します。カッコ内の名前は代表者のご氏名です。心から感謝の意を表します。（敬称は略させていただきます）

富山県公営企業職員労組（屋敷良昭）
全電通青森電話分会まなぶ友の会（戸田喜久雄）
全国金属初田支部（菊池晴一郎）
全印総連南海印刷労組（吾妻正三郎）
全国金属村上製作所支部
川越電車乗務区まなぶ友の会
全林野大分分会（亀井宗郷）
京福バス市内線白浜一同（桑原静雄）
第十回全国まなぶ読者大会東京代表団
まなぶ友の会北地区協議会
全通根占分会（神脇政弘）
国鉄労組日田分会
大分市大字浜＝中西新一
長崎県平戸市宝亀町＝作江清治
埼玉県久喜市古久喜＝守田耕一
加古川市尾上町＝菅野逸雄
東京新宿区北新宿＝岡　伸
香川県三豊郡豊中町＝篠原清
東京練馬区旭町＝浦口俊郎
横浜市南区八幡町＝井上延久
臼杵市風成＝木下清一
鹿児島市共栄町＝田辺俊一
長崎県大村市新城町＝松尾勝蔵
高知市朝倉＝岩下好夫
長崎県諫早市福田町＝川口八洲
大分県南海郡米水津村＝堀川仁郎
郡山市郡山郵便局内＝山口睦子
千葉市検身川町＝木村三男
水俣市旭町＝木原進
宮崎県延岡市土々呂町＝黒瀬陽子
田川郡金田町宝見九電社宅＝井上欣也
長崎市上小島町＝村上修二
北九州市小倉区白萩町九電北九州寮＝宮本牟明
北海道釧路市中島町泉福荘＝吉田美智男
鹿児島県姶良郡隼人町＝東　実
綾部市梅迫町梅迫局内＝四方正博
宮崎市吉村町潮見寮＝高見勝義
大分県東国東郡安岐町＝加藤悠紀緒
津久見市千怒＝安井武光
荒尾市妙見区＝松尾隆広
日田市上城内町＝奥森修二
横浜市戸塚区公田町＝田中欽一
安城市御幸本町＝内藤　要
神戸市＝池田一夫
埼玉県北本市石戸宿＝永沢章次郎
大宮市東大宮＝田中和雄
〃　盆栽町＝川崎基司
奈良市大安寺町大安寺寮＝光本佳司
国鉄労組新幹線まなぶ友の会（阿部順栄）
東京練馬守る会（杉本聖）
新聞運送労組（加藤　勇）
全通下谷支部
〃　中郵支部（渡辺由紀子）
社青同
社会党東京都本部
まなぶ友の会浦和地区協議会

×

各指導部におねがい。全国の仲間の皆さんからカンパが寄せられてきたときは、かならず本部編集部までその機関名と代表者名（個人の場合は住所と姓名）を報告してください。

おわび

本紙前号一面の記事「多いガン内臓障害、CO患者の恐るべき死因」のなかで、死亡したCO患者の方のうちで、「稲田末雄さん、四七年五月九日死亡。気管内分泌物による閉鎖」の一文を落としましたので、改めてその文を記し、心からおわび致します。

主張

熱中症闘争の勝利とこれからの課題

――ビタミン欠乏症に公傷現認

「熱中症を、業務上傷病として認めよ」――という要求を掲げた闘いは、去る七日、熊本労働基準監督局長の見解が出され、業度上傷病として認定される方向へ大きく前進した。

思えば、業務上傷病として認定される見通しを得るまでの道程は長かった。

――温度三二・五度。カタ度七の職場環境は、熱中症が発生するほど悪い環境とは思わない。

証は出せない。

会社側の、こんな主張を今日までそのまま認めてきた労働者は、ほんとうに〝お人好し〟だったわけである。

労働者は、もともと正直だ。長年公害をたれ流し、住民が問題にしない限り、いつまでもほお冠りするような、どこかの大企業などとは比較にならない。

この、正直者の労働者がたまりかね、「熱中症は当然業務上の傷病として認められるべきである」と主張しはじめてから、早くも二年になる。今回の、熊本労基局の調査の結果、会社のこれまでの主張が見ごとくつがえされ、正直者の労働者の主張が認められたのであるから、三池炭鉱に働く全労働者にとってこれほどうれしいことはない。

会社側の不当な主張を許さず、不当を不当として追及していく思想をはぐくんだのは、ほかならぬ命を守る闘いの基本的なものとして、すでに九年間闘い続けてきたCO闘争であることはいうまでもないが、われわれが熱中症闘争を通じて追及してきたものは――

第一に、当然業務上傷病として認められるべき〝熱中症〟が、労働者の私的責任に転嫁され、私傷病に、これと同じような、さらに数多くの問題がころがっているのではないかを、いわば問いつめたことにもなり、全労働者として、もう一度自分の職場を点検し直すよい機会をつくってくれたのである。

当然、考えられる今後の課題としては――

第一に、〝熱中症〟の認定基準は、実際にはこれからつくられていく、ということをはっきりつかんでおかなければならない。〝腰痛症〟の一定の認定基準が、闘いの積み重ねを通じて確立されていったのとまさに同じである。

第二に、どんなに快適な職場環境をつくりあげていくにも、「炭鉱はあぶなくて熱いのが当りまえ」という既成の常識・観念を克服することが先決である。

第三に、より大きい課題は「労働者は、時どき勝つことがある。しかしそれは、一時的なものである」、といったマルクスの言葉の通り、資本はここで失ったものをどこかで取り返えそうとねらってくることは明らかで、この点をわれわれはどんな闘いを進める場合も忘れてはならない。

われわれは常に、資本主義的常識のなかで生きている。この常識のかす漬けにならないためにも、日常の討議、学習を大切にしなければならない。抵抗なくして安全なく、安全なくして労働はない。

×

考えて見ると、こんどの熊本労基局の見解は、われわれのまわりに、これと同じような、さらに数多くの問題がころがっているのではないかを、いわば問いつめたことにもなり、全労働者として、もう一度自分の職場を点検し直すよい機会をつくってくれたのである。

当然、考えられる今後の課題としては――

第一に、〝熱中症〟の認定基準は、実際にはこれからつくられていく、ということをはっきりつかんでおかなければならない。〝腰痛症〟の一定の認定基準が、闘いの積み重ねを通じて確立されていったのとまさに同じである。

第二に、どんなに快適な職場環境をつくりあげていくにも、「炭鉱はあぶなくて熱いのが当りまえ」という既成の常識・観念を克服することが先決である。

第三に、より大きい課題は「労働者は、時どき勝つことがある。しかしそれは、一時的なものである」、といったマルクスの言葉の通り、資本はここで失ったものをどこかで取り返えそうとねらってくることは明らかで、この点をわれわれはどんな闘いを進める場合も忘れてはならない。

われわれは常に、資本主義的常識のなかで生きている。この常識のかす漬けにならないためにも、日常の討議、学習を大切にしなければならない。抵抗なくして安全なく、安全なくして労働はない。

×

日経新聞が注目の報道

石炭部門を分離

目標は来年の四月

第五次政策のなかで

三井鉱山

三井鉱山が、これまで企業体の踏み台として経営してきたかんじんの〝石炭部門〟を分離することは、すでに一部の新聞では取り沙汰されていた。こんど、より明確な形をとって日本経済新聞（九月三日朝刊）が報道したことが、いよいよ資本の深部でこの計画が相等進んでいることを裏書きしたものといえよう。

これまで三池と同じビルド鉱といわれてきた太平洋炭鉱でも、現在強行されている第五次石炭政策の要求にこたえるために、現在の能率の七十トンを、きたる五十年度には百四十トンにまで引上げることを狙い、人員縮小の計画を進めており、北海道炭鉱も閉山計画を進め、さらに昨年歌志内と奔別の両鉱を閉山し、赤平に生産を集中したばかりの住友が、再度首切り合理化計画を進めているといわれる。

そのような石炭情勢のなかで出てくるこんどの分離問題は、必ずや労働者に対するはげしい攻撃となってくることを疑うことはできまい。

とまれ、問題の日本経済新聞の記事のなかから、とくに重要な部分を抜すいしておく。

記事の抜すい

――石炭業界の最大手、三井鉱山は石炭部門を分離し、別会社とする方針を固めた。

――分離の進め方は①新しい会計年度のはじまる来年四月一日とする。②一鉱山一社方式をとらず三池、芦別、砂川の三鉱山を合せて一つの生産会社とする。③販売部門は三井鉱山が引き続き担当する、などである。

――三井鉱山がついに主力の石炭部門を分離する方針を決めたのは、第五次石炭政策の答申が直接の理由である。答申によると、石炭合理化事業団の中に新しく管理委員会を設置、経理面の監査が一段と強化されるため、石炭事業にますます国家管理的な色彩が濃くなっていく見通しである。

同社の事業部門は石炭が六七・一%、石炭製品二%強、石油一五・七%、建材一五%強で、約三割が非石炭部門で占められている。このため先行き国家管理的な石炭部門と、他の部門を同じように経営することは困難になると判断している。とくに国家の助成を受けている石炭部門の利益を、非石炭部門に流用することなどは許されないだろうとみている。（いままではさかんに流用してきたことを示しているといえる）

――第五次石炭政策は五十年度の出炭量を二千万トンと決めたが、……同社の三山はいずれも国内で優良鉱山なので、ワクの中にはめこめる可能性はあるとしているものの、今後石炭を中心としての企業の成長を図ることはとうてい望めない。そこでこの際石炭部門を分離して、新しい事業展開に乗り出そうというもの。

（以下略）

連載小説

或る報復

三川岡浦益実

（7）

強一が小学校に入学してから一学期が過ぎた。夏休みに入ると子供の世界だ。長姉に作ってもらった虫とり網を持って、強一は顔や手足をやいて遊びまわった。

近くの神社の森では、朝になるのを待ちかねたように蟬がやかましく鳴いていた。生きている短い期間を、できるだけ多く鳴いておくつもりなのだろうか……。

昼過ぎ、雪子が二つ割にした西瓜を抱えてきた。

「ばばちゃん、はい西瓜」

「おう、これはこれは」、クラは雪子から西瓜を受けとりながらいった。「ありがと、ありがと……」

「強ちゃんは、うちで食べんねゲナよ」雪子は強一にいった。

雪子は可愛い顔をしている。大きな目と上品な鼻と、形のよい唇が白い顔に行儀よく納っていた。

雪子の家で西瓜を招ばれた強一は、雪子を誘って虫とりに行った。

神社裏にはいろいろな昆虫がいたがなかなか思うように捕獲できない。雪子の提げている虫かごには、塩辛とんぼとカナブンが五・六匹へばりついていた。蟬はどれも高い所で鳴いていて強一には届かない。

「もう帰ろい」雪子が退屈して強一を促した。

「うん、帰ろか」強一もあきらめてすぐ同意した。

二人が境内に出てきた時、銀ナンの木の下でケラを見つけた。人の気配を察知し、土の中に逃げこもうと、必死に前足を動かしているケラを強一が素早くつまんだ。ケラは強一の親指と人さし指の間でもがいた。

しるしばかりのハネを背部につけ、シャベル代用の頑丈な前足を持つケラはなかなか愛きょうがあり、子供たちに「もぐらン子」と呼ばれていた。

強一は、つまんだケラを雪子の目の前につき出して、ひょうきんな声でいった。

「ユッコのチンチンどん位か」

もがいていたケラの前足が、精一杯広がったまま静止した。

「ウワー、こげん太かゲナ」

強一は両手を広げておどけた。

「こげん太か、ハハハ、もぐらン子がいうたぞ」

「強一のバカ」いきなり雪子が叫んだ「うそよ、強一のバカタレ……」雪子は、からかいながら逃げる強一を追った。

「おとっちゃんにいうけんね、バカ強一が……」虫かごも放りだして、死にもの狂いで追いかけた雪子は、強一に頭から突進した。

胸に雪子の頭突きを受けた強一は尻餅をついた。雪子は両手で強一の肩や胸を激しく叩きながら押し倒した。

「強一のバカ、バカ強一」拳をふる雪子の目に涙がにじんでいた。こんなに雪子が怒るとは思っていなかった強一はとまどった。

「ごめんごめん、いまんとは嘘たい、勘忍ぞね」強一は、倒れた自分に覆いかぶさり、なおも両手でところかまわず叩いている雪子の汗臭いにおいをかいだ。先刻一緒に食った西瓜のにおいも混っていた。

「オルが悪かつ、勘忍ぞ、ネ」

強一は謝りながら、いつまでもそうしていたいという思いにかられていた。